

## 待機出動の途上、市民の要請で救助・消火活動に従事（1995年3月号掲載・田辺 具広）



消防署で仮眠中、ドカンという音と激しい揺れに一気に目が覚める。一瞬、近くでガス爆発事故でもあったのかと思い、待機室の窓から周囲を見渡すと煙も見えず、何が起こったのかわからなかった。6時ごろ、付近住民から受付に「ガス漏れが発生している」との駆け込み通報があり、情報通信室でそれを受け付けし、その旨、当直中隊長に報告する。

そのうち付近住民から避難要望があり、緊急避難所として2階研修室を開放する。時が経つとともに、避難者は増えてくる。6時過ぎ、署員がラジオでは神戸市の震度は6であると発表している、という。6時10分ごろ、本部管制室から甲号非常招集を発令したとの連絡が入り、全署員に対して非常招集電話を非常順次呼出通報装置でかけるが、市街地の職員との電話連絡は大半が通話不能であった。

6時40分ごろ、本部管制室から「長田消防署へ1隊待機出動せよ」と指令が入り、小型ポンプ車の小隊長として出動する。国道2号線を東に向かって走行していると、垂水区塩屋町1丁目の倒

壊家屋現場で、垂水消防署の 2 隊と垂水消防団塩屋分団が救助活動を展開しているのを横目に東に向かう。

須磨区に入って須磨浦公園を過ぎると、辺りの様相は一変する。国道 2 号線沿いの民家は、あちこちで倒壊し、垂水区内とは被害の規模が違うことに気づく。須磨本町 2 丁目付近にさしかかったとき、数名の住民が道路の中央に飛び出して来て、消防車の進行を妨げ、それぞれが「倒壊家屋の中に数名の要救助者がいるので、救助してほしい」と救助を求めてきた。下車して状況を聞くと「家屋が倒壊し、3 人が家屋の下敷きになっており、声がする」とのこと。現場を確認すると木造 2 階建ての建物が倒壊し、2 名が梁の下敷きで身動きできない状態であった。

乗組員 4 名のうち、3 名で救助を担当し、機関員は周辺の情報収集を開始した。ポンプ車であるため、救助資材として使用できるものは斧のみである。付近の民家から鋸 1 丁を借り、梁等を切断して 2 名を救出した。一方、機関員は周辺の 2 軒の倒壊家屋から 2 名を救助している。

4 名を救助後の同日 9 時ごろ、JR 須磨駅の東側の須磨区須磨浦通 3 丁目で火災が発生したため、救助現場から反転して西に戻り、国道に面した消火栓に部署したが断水で使用できない。このため、JR 山陽本線を超え、千守川尻の橋に部署し、線路下を流れる川を潜ってホースを延長する。先着していた垂水の救助工作車隊と共同して消火活動にあたる。また、この火災より先に発生していた千守町の火災も同時に消火活動を行う。川尻の自然水利も潮の干潮で吸水も不能になってしまう。

当初、本部からの指令は「長田消防署へ待機せよ」であるが、出動途上で被災した市民に救助を要請され、指令とは異なった活動内容となってしまったが、当時の状況からしてやむを得なかったと思う。多くの犠牲者が出た今回の震災で、数名でも救出できたことは消防の使命を全うしたと確信している。